

# 結草

k u s a m u s u b i

No.45

Publishing house: 2-19-32 Moriyama Kanazawa  
Ishikawa 920-0843 JAPAN Shinshu Otani-  
ha Ryukouzan Jhokoji Phone: 076-252-4922  
<https://jhokoji.net> info@jhokoji.net 2025.12.1

## 亡き人を訪ねる

順教寺住職

細川 公英

順教寺の細川と申します。今年も浄光寺様の追弔会のご縁を頂戴いたしました。今からしばらくの間、皆さまと共に南無阿弥陀仏のみ教えを聴聞させて頂きたいと、このことだけ願って出て参りました。何卒よろしく願い申し上げます。

本日一同にご本尊阿弥陀様の御前で合掌し、南無阿弥陀仏とお念仏を申させて頂いた。南無阿弥陀仏の教えというものは、これは私の先生がよくおっしゃっていたのですけども、頭

を空っぽにして、要するに難しいことを考えんでもいいということですよ。そして、ただ仏様のお言葉に出あつていく。仏様のお言葉というのは、お経さまのお言葉ですね。あるいは、その南無阿弥陀仏の教えに出あつていかれた方々のお言葉です。その代表は、親鸞聖人と申してよろしいかと思えます。今から七五〇年以上前、鎌倉時代にお生まれになられた。その親鸞聖人の残されたお言葉を現代の私たちはいただいております。

るわけですよ。そういう南無阿弥陀仏の教えに出あつていかれた方々のお言葉に、出あつていくこと、ここが一番大事なことです。そのお言葉は、今の我が身のことを言い当ててくださっているのだなと思います。

「ここへ、ここへと聞いていくのですよ」と私の先生は言いました。「ここへ、ここへ」と、この胸に手を当てられましてね。そうすると必ず思い当たることがあると。今の我が身のことを言い当ててくださっているのだなと。親鸞聖人は遙か昔の方だけれど、そうじゃなかったと。私のことをちゃんと言い当ててくださっておる。さらに親鸞聖人、そして今の私も同じ生身の人間、苦悩する人間として何も変わらん。時代、状況は変わった。ただ、人間として生きる苦悩とか、悲しみとか、あるいは寂しさとか、そういうことに関しましては今も昔も全く変わらない。苦悩する身としては

等しい。人間の本质に出あわせていただく。そういう我が身を言い当ててくださるお言葉に出あうことはなかなか難しい。私たちは他人事、我が身抜きになりますから。自分に関係ないとそういう風にどうしても見えてしまいますがそうじゃない。我が身のことであつたなど。ですから本日は我が身を言い当ててくださるお言葉を皆さんと一緒に訪ねていきたいな、そんなことを思っておるわけでございます。

松任の本誓寺の松本梶丸先生がこういうお言葉を残されました。「いかなる人に出会い、いかなる言葉に出会うか。人生を決定する一大事である。」人との出あい、あるいは仏様のお言葉、あるいは教えに出あつていかれた方々のお言葉に果たして私たちは出あつておるだろうか。逆にそういうことが問われてくるのであります。人と出あい、言葉に出あうというのは日常ですね。今まで人生を生

きてきた中で色々な人に出あっています。今たくさんの言葉や情報が色々なところから発信されていますから言葉は溢れています。しかし本当に我が身自身に教えられるそういう言葉に果たして出あっておるだろうかというところが問われる。ですから私はこのお言葉に出あってね、このお言葉も大事なお言葉やなと、そういうことも改めて思いました。

今申したように色々なところに言葉が溢れています。本や映画、舞台、お芝居、そういうものを通して我が身を教えられるということもあるわけでありませう。その一つの例として小説家、村上春樹さんの初期の作品『風の歌を聴け』という小説がございますが、その中の一節にこういってお言葉がございました。「私がこの三年間にベッドの上で学んだことは、どんなに惨めなことでも人は何かを学べるし、だからこそ少しずつでも生

き続けることができるのだということです」と。非常に何と言いますか教えられる。ここではベッドの上で三年間、これは要するに自宅ではなくて、病院で三年間、寝たきりの生活を送ってらっしゃる。どんなに惨めなことでも人は何かを学べるのであると。

どうでしょうか、私たちはそういう状況に自分になった時、あるいは家族がそういう状況になつて自分が介護しなきゃならん、そういう状況になった時、果たしてこういうような気持ちが出てくるかどうかですね。なかなかこれは、心の中では色々な思いが交錯することでございます。しかしベッドの上でも学べる。どんな状況においても人間というのは学べるのである。だからこそ少しずつでも生き続けることができるのである。非常に何というか一筋の光を私たちに投げかけてくださるお言葉やなあと改めて思うわけでございます。

親鸞聖人自身が、我が身にうなずかれたお言葉を一つご紹介したいと思えます。「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん人は先を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんかためのゆえなり、と」。親鸞聖人がお書きになられた『教行信証』、その一番最後のところにある中国の道綽禅師のお言葉。正信偈には「道綽決聖道難証」とありますね。その道綽禅師の『安樂集』のお言葉に親鸞聖人は感動なさったのです。すごいですね。親鸞聖人は遙か昔の中国の道綽様のお書物を読んで、これや！と多分頭が下がったのだと思います。今の我が身の事実を言い当ててくださっておると感動なさって、御自身の著作の最後のところに引用なさったのです。だからよほど親鸞聖人はこのお言葉に喜び感動したのでですね。そういうことが伺えるわけでございます。

「後に生まれん者は前を訪え」、「後に生まれん者」というのは、今の私たち、皆さま方お一人お一人とそういただいで下さい。「前を訪え」、「前」は先に生まれた方です。具体的には先にお浄土に往かれた方々。亡き両親であったり、亡きおじいちゃん、おばあちゃんであったり、亡き方々です。私たちにとつて大事な方、先にお浄土にお帰りになったすべての皆様を指します。しかも、自分だけのご先祖様だけというわけではなくて、もう全てのお浄土に帰られた方々になります。後に生まれた我々は前に生まれた方を訪えと道綽様はおっしゃるわけですね。

ちよつと漢字に注目してください。「とぶらう」は、どんな字書いてあるかという訪問の「訪」。これは辞典を引きましても、「とぶらう」と読ませています。普通「とぶらう」といつたら「弔」、この字を書くと思えますね。追弔会の「弔」の字

ですね。訓読みで「とぶらう」  
と。だからこの字を使つてもい  
いのだけでもあえて道綽禅師  
は、「訪」というこの字をお使  
いです。やつぱりここに意味が  
あるので、辞書で調べてみまし  
た。確かに「とぶらう」とあり  
ました。意味は①訪問する。見  
舞う。②尋ねる。は人に何かを  
尋ねる、物を尋ねる。あるいは  
問う。問い。③慰問する。④探  
し求める。やつと⑤に追善供養  
すると本来の追弔という意味が  
出てきます。だから追善供養す  
る以外にも人に問うとか、ある  
いは尋ねるとか、探し求めると  
か、そういう意味があるのだと  
いうことが分かりました。

非常に現代はだんだんなくなっ  
てきた。メールやLINEで済  
ませるということが多いでしょ  
う。要するに相手の顔が見えな  
いわけです。昔はそうじゃな  
い、そういう手段がなかったか  
ら訪ねて行って直接お会いして  
お顔を見てそこで会話対話をし  
て、色んなことをまた問うて尋  
ねる。それで人間というのは何  
か安心感が得られるでしょう。  
亡くなった方を私たちが訪ね  
るとはどういうことだろうか。  
私たちが亡き方を訪ね、そして  
色んなことを問い、聞き、大事  
なことを探し求める。この代表  
がご法事でしょう。本日の追弔  
会も正にそうですよ。本日の追  
弔会の一番大事なことは今の私  
たちが、亡き方をお訪ねして直  
接色々なお話をする。もちろん  
声は直接には返ってきません。  
返ってこないけれども、どうい  
う風な返事を返してくれるのか  
と想像はできる。もし今あの人  
がおいでなのなら、今の私にど  
ういう風にアドバイスしてくれ

るかな。どういう風に声をかけ  
てくださるかな。だからそうい  
うことをじっくり考えるという  
のが実はご法事の大事な一つの  
意義だと思う。本日の追弔会も  
そう。亡くなったじいちゃんが、  
ばあちゃんも、もし今ここに  
いでたら、この私に何て声をか  
けてくださるでしょうか。もし  
親鸞聖人がここにおいでなさつ  
たら、この私に何とお声をかけ  
てくださるでしょうか。そうい  
うことを念ずるのが追弔会。た  
だ単にお経さんをいたただいてや  
れやれ終わったというだけじゃ  
なくて、もう一歩踏み込んでそ  
ういうことを我が身に聞いてい  
く。そのことを家族とちよつと  
話し合うとかね。そういうこと  
ができたなら素敵ですね。私はそ  
う思います。

あるいは驚き、感動というもの  
がある。亡きじいちゃんは、ば  
あちゃんは、大事なあの人は、  
あるいは我が子かも知れん。あ  
の亡き方はこういうご苦労と悲  
しみを抱えていらつしやつたの  
か。人生を生きるにおいてこう  
いう悲しみ、苦しみというもの  
を抱えて人生を歩んでいらつ  
しやつたということにほんの少  
しでも気づかせていたかどうか  
ば、それは私たちの生活におい  
て非常に大きな励みになりま  
す。そしてその苦悩というのは  
この根本は一緒であつたと。こ  
こがまた大事です。  
苦しみ悩む根本は、昭和の時  
代を生きられた方、鎌倉時代を  
生きられた方、あるいはその前  
を生きられた方、苦悩の表面は  
違うけども、お釈迦様が言い当  
ててくださった生老病死という  
苦悩、これは同じであつた。生  
まれるということにおいての苦  
しみ。老いるという苦しみをや  
はりお持ちであり、病いという  
苦悩もお持ちであつた。そして

死という絶対避けて通ることの  
できないという苦しきもお持  
ちであったという事に改めて  
気づかせていただく。そういう  
ことが法事の大事な一つのこ  
とだと思ふ。そういうものに出  
あわせていただく。これは新し  
い発見になります。そして、今  
の私が苦しんでおったことも、  
悩んでおったことも、すでに我  
が父親も母親もちゃんと経験し  
てくださっておったことやった  
と。そういう風にいただくとし  
きる力を与えてくださる。

去年からお寺の納戸の整理を  
始めました。そうしたら一つの  
日記が出てきました。これは誰  
のものかという、私の祖父の  
弟、大叔父。その方は細川公生  
といひます。大正四年、順教寺  
に生まれました。小さい頃から  
勉強が好きだった。金沢の四高  
に行つて、そこから今の東大に  
進んだ。その日記というものが  
十八歳の時のものです。昭和八  
年三月十三日という日付。私は

読んでびつくりしました。

「勉強だけの人生は淋しい  
真に求める所がないのかもしれ  
ない。しかし何を如何にして求  
むべきか。人生は空漠だと思  
ふ」、この空漠っていう字も難し  
いのだけでも、要するに漠然と  
して、虚しいっていうことです。  
取り止めもない、掴みよくな  
い何か虚しさを表しているよう  
な言葉であらうかなと思ふ。人  
生は空漠だと思ふ。続いて「真  
理とは何だ。どこにあるのだ  
もしつかめたとしてもそれをど  
うするのだ。漫然と本を読む中  
は読書の淋しさが分からない  
読書は何の為にするのだ。僕は  
知らなかつた。そして今も知ら  
ない。今まで読書は僕に何を教  
えてくれたか。より難しい本を  
読む下準備をしてくれた位だと思  
ふ。そして一番難しい本が読  
めるようになったにしてもそれ  
からどうする積りだ？読書して  
何を何所に求めんとするか。私  
は今こんな疑問に直面して。そ  
の解決策を読書から得んとして

いる。何んという愚さだ。無益  
だった読書に今後も執着して行  
く気なんだろう」と。こういう  
日記が出てきた。自分の十八歳  
の時と比べて恥ずかしくなつて  
きました。どこにびつくりした  
かという、その後にもこう続く  
「歎異抄が読みたい」と。『歎異  
抄』というのは親鸞聖人の語録  
です。親鸞聖人がこういうこと  
おっしゃっていましたというこ  
とを弟子の唯円という方が親鸞  
聖人がお亡くなりになつた後に  
一冊の書物まとめられた。この  
歎異抄を読みたいと。そこに私  
は感動しました。続けて「うん。  
読むがよからう」「何故読みた  
いのだ」「？」これご自分で問  
うているのです。なんで読みた  
いのだと。お前、歎異抄を讀み  
たいといつてもその理由はなん  
ぞやと。最後クエスチョンマー  
クで終わつておるわけでありま  
す。

二十七歳で亡くなつていたので  
す。腸チフスに罹つて、一晩で  
体調が悪くなつて、すぐ亡く  
なつたのです。だから、多分若  
い時から自分の体に関して苦し  
んでいらつちやつた。なんで自  
分はこんなに体が弱いんやと。  
若いけれどもそういう健康に対  
しての苦悩というものを人一倍  
持つていらつちやつて苦しんで  
いた。そういうことがこの日記  
から伝わつてくるわけです。  
「歎異抄が読みたい」という、  
ここにね、私は非常に感動した。  
公生さんも身を生きるというこ  
とにおいて本当に苦しんでい  
らつちやつた。如何ともしがた  
い、どうしようもない。しかし  
実はそこに光を求めておる。親  
鸞聖人のお言葉に出あつていき  
たいと。だからそういう意欲と  
いうか、願ひというものがこの  
文面から感じ取られるわけであ  
ります。  
東大に行つたら、そこで全国  
の真宗の出身の生徒さんが集  
まる寮がございます。南無阿

弥陀仏の教えを聞くというご縁がそこでたくさん生まれるわけです。公生さんも大学行ってからより一層南無阿弥陀仏の教えに出あうそういうご縁があったんやなということをご縁が去年初めて知ったわけです。

こういう人がおった。ただ単に学問が好きというだけじゃなくて、やっぱり苦しんでいくということなんです。どれだけつらかったのだろうと。苦しみがいておったのだろうと。どうにもならん自分に、あたわったこの命に対して本当に苦悩されておったんやなど。でもそこで沈まず、南無阿弥陀仏の教えを聞いていかれたんやなどということを知って私は公生さんからすぐ教えられたわけです。お前も、毎日の生活において苦しみ、悩みもあるだろうと。当然あるに違いない。それを見ないようにしていないか、避けてはいないかと。それでは本当の解決にはならないぞと。まず自分が何を悩んでいるのか、何を

悲しんでいるのか、どうなりたいかと。そしてお前は住職として今本当に教えを聞いているのかと。真宗の僧侶として衣を着ているのだろう。本当にお前は教えを聞いている身なのかというところが、何か公生さんのほうから強く鋭く私に問いかけてくるような感じがしてそのことがうれしかったのです。当然お会いするご縁はなかったわけです。けれど改めてその日記を通して、公生さんと出あい直すことができたなど。そういうことでしよう、ご法事を勤めるといふのは。この世では全く会うことがなかったけども、その人と出あい直していく。そういう時間とつて本当に幸せな時間です。なんかそういうことも思いました。

「後に生まれん人は前を訪え」、そうすると、こういうことが見えてきます。前に生まれん者は後を導いてくださっておつ

たということですよ。前に生まれた方はその苦悩の人生を南無阿弥陀仏と共に歩まれ、後に生まれられた私たちをちゃんと教え導いておられる。単なるご法事を勤めただけに終わっていただけで、前に生まれた方々を訪ねてみれば、実は今の私をちゃんと導いてくださっている。例えば五十回忌を勤めた。五十年経つても亡き方は私のことをちゃんと見守って、私を教え導いてくださったとその事実を改めて気づかされていく。そういうことですね。その厳粛な事実は今やっとなんか私に気づかされた。なかなか気づけないのです。時間が経つというのもある意味大事なこと。

今年の二月に亡き父の一周忌を迎えました。その亡き父が私のことをちゃんと教え導いておつたっていうことになかなかうなずけないのです。本当にその人に対して頭が下がるといふことが今でもまだできない。何

か知らん邪魔をするものが私の中にある。素直になれない。ましてや目の前にいた時はなおさらです。絶対頭なんか下げるかと。それが今直接話すこともできなくなつて日がだんだん過ぎていった。

亡き父親は私に何を一番願っておつたのか。お前、このこと一つだけどうぞ大事にしてくださいと直接言葉をかけてくださらなかつたけども、必ずその願いというものはあるはずなんです。そのことをやはりこれからの人生においてこの私は訪ねていかなければならないでしょう。一体父はこの私に何を教えてくださつておつたのか、これは私自身のこれからの課題でもあります。あと何年生きるのかわからないけれど、この娑婆にご縁がある限りは人生をかけてそのことを訪ねていくということが人生において特に大事なことでと思います。そのことが生きるということにもつながってくるわけです。そしてまた次の世代にどう

か繋がってほしい。その願いを受けて私の人生全体を通して父はこういうことを願っておったのだな。それが息子に伝われば一番ベストですけれど、これはなかなか難しい。自分も聞けなかつたからです。ずっと反発しかなかつたですから。しかし必ず分かる時が来る、気づいてくれる時が必ず来るのである。そう信じて残りの人生を南無阿彌陀仏と共に生きていくことがやはり大事になってくると思う。

皆さま方も先を見たら非常に不安になってくるでしょう。私なんか不安ばかりです。この先どうなるのかなあ。今はまだいいと。でもこの先必ず老病死が来る。これは避けて通れない。これはもう真理ですね。どれだけお金を持っていて、どれだけ名声を得ても、これだけは避けて通れないわけです。どれだけお金を持っていてすごい医療を受けてもね、先延ばしした

けです。一年先に延ばすか、二年先に延ばすかだけです。言葉が悪いか、必ず老病死に捕まってしまう。先ずはそういう命を今生きているのだというこの気づきです。そこからどう生きようかっていう方向性が決まってくると思う。その時に先にお浄土に往かれた方々のその願いとか思いというものが実は自分にかけられていたのだという事に気づけば、そこから生きる意欲やエネルギー、力をいただくことができ、私も一日一日、お念仏と共に歩んでいこうと思う。

いらん心配はしなくていいという事です。我々はいらん心配しているわけです。終わったことをよくよといつまで経つても、あの時ああしてあればよかったのかという後悔。ああなったらどうしよう、こうなったらどうしようというのを今不安に思うわけです。今一番大事なこと、今というこの一瞬、この一瞬をなかなかただけな

いのです。本当は逆でしょう。今いただいたこの只今この命を改めてそうであったといただき直す、そういう毎日を送る。いただくというのが大事なことになる。改めて思うわけでございます。

実は亡き人はずっと待ってらっしゃるわけです、私たちの気づきを。今を生きる私たちが亡き方の深い願いをいただいているってことになかなか気づけない。亡き方はずっと待っていない。二十四時間三六五時間ずっとこの私たちを見てくださっておる。呆けている時も、愚痴を言っている間も亡き方、仏様はちゃんとこの私の存在を見てくださり、愛情いっぱい注いでくださっておるのではありません。先にお浄土にお帰りになった亡きじいちゃん、ばあちゃん、亡き父母はこの私の存在をずっと見守ってくださいとおった。その目覚めをただただ待たれていたということであ

ります。第二次世界大戦中のユダヤ人の強制収容所アウシュビッツの中での出来事。フランクという方は心理学者です。そこで二人の方と出会うわけです。そういう状況ですから、もう絶望です。今日か明日かともう絶望の日々を送っていた。そういう中であつてフランクのお言葉にこのお二人は救われていくわけです。こういうことを言ったかという、これは『夜と霧』という書物の中に紹介されてあります。

「収容所の絶望にあつても、一人一人に備わっているかけがえのなさ」を意識すれば、人は生きることから簡単に降りられぬ」とこういうお言葉がありました。一人一人に備わっているかけがえのなさに気づけば、人は簡単に人生から降りることができません。要するに生き続ける力が出てくるのであると。

但しそれは備わっているか  
けがえのなさに気づくかどう  
か。今の時代、我々一人一人に  
備わっているかけがえのなさとい  
うことがだんだん見えなくなっ  
た。自分自身に備わっているか  
けがえのなさに気づくかどう  
か。こんな老い

づけないでしょう。こんな老い  
てしまつて若い時なら良かった  
けれども、病でベッドに横たわ  
る生活になつてしまつたし、も  
うわしはダメや、おつても仕方  
ないわというのをやつぱり心  
の中で思うじゃないですか。あ  
の人はいいなと他人と比べて  
ね。やつぱり私はダメやなつて。  
これはね、一人一人に備わって  
いるかけがえのなさを見失つて  
いる在り様ですね。

そうじゃなくて、なんと命に  
対して失礼なことを思つていた  
のか。今ここにある命、この我  
が身がここにおるつていうこ  
と、それ自体がもうかけがえの  
ない尊い尊い縁であつたと。  
私の判断で測られていくような  
そんな浅い命ではなかつた。ま

さに仏様から頂戴したかけがえ  
のない一期一会の命をいただい  
ておつたということにもし気づ  
けばどういふ厳しい状況下に  
あつても生きるといふことがそ  
こから生まれてきます。

そこでもう一つ。今日これが  
一番言いたいことです。この私  
を待つていて下さる方がいるの  
です。こんな私でもちゃんと声  
をかけてくださる人がいるので  
す。こういう私でもちゃんと願  
いをかけてくださるそういうお  
方がたくさんいらっしゃる。そ  
ういうことに気づけば絶望だけ  
れどもその状況の中を生きてい  
けます。人間つていふのは。ど  
んなに惨めなことでも人は  
何かを学べるし、だからこそ少  
しずつでも生き続けることがで  
きるのだ。村上春樹さんの先ほ  
どの小説の一節に繋がつてくる  
わけです。私は願われているの  
だ、待つていてくださる方がい  
るのだ。

皆さまにおかれましては待つ  
ていてくださる方はいらつしや

いますか。ちよつとお考えになつ  
てください。今日の宿題です。  
現実の生活を見ると、旦那も私  
のことを待つてくれているよう  
なそんな感じもしないし、子供  
もおるけれども子供は子供で私  
のことなんか別にどうでもいい  
ような感じ。そんな私は一人ぼつ  
ちかな、誰も待つていない。孤独。

誰も私の存在を待つていない人が  
いない。寂しい。そう言わざる  
を得んでしよう。一体誰が私の  
存在をちゃんと待つてくださつ  
ておるのか。現実生活見てもそ  
れがなかなか納得いかんとい  
うのが正直なところ。現実は  
そう。

自分の計らいではそうかもし  
れないけども、私より先にお浄  
土にお帰りになつた方々全てが  
今の私を待つてくださつておつ  
たということ。五十年前、  
百年前、五百年前に逝つた全く  
知らない方。でもそういう方々  
全てが私の存在をちゃんと待つ  
てください。あなたも  
念仏申して生きよ。お念仏申

してください。共に念仏申し  
ましよう。実はそういう声が  
南無阿弥陀仏の声となつてこの  
私にも、皆さま方お一人お一人  
にも届いておるのです。

だって南無阿弥陀仏申す  
でしよう、皆さん。例えばお墓の  
前で南無阿弥陀仏と手を合わせ  
ます。このお墓はご先祖様が  
いらつしやるわけでしょう。私  
ちにとつて一番身近な方、先  
にお浄土にお帰りになつた方々  
ですね。そのお参りをさせてい  
たく。南無阿弥陀仏申すだけ  
う。その南無阿弥陀仏は自分  
から言つた南無阿弥陀仏だけ  
も、これは先にお浄土に往かれ  
た方々が私のことを念じ心配し  
て、あなたも念仏申せと、私は  
あなたの存在を心配しておるん  
やと。ちゃんとあなたを待つて  
いるのだと。共に念仏申そうね  
と。そういう亡き方の声でもあ  
るのでしよう。

それに気づけばどうでしょう  
か。自分は一人や、寂しいなあ  
つて思つておつたけども、そう

う思いがひっくり返って私という人間には、先にお浄土に往かれた方々、そこには親鸞様も含まれますし、お釈迦様もいらっしやいます、全ての方々がこの私一人のことを心配なさって声をかけてくださる。そういう励ましを受け、お育てを受けた身であるということに気づかされていくのであります。そんな心強いことありません。自分の思っただけやったら面白くないと沈んでいきますよ、必ず。でも南無阿弥陀仏に出あえばひっくり返る。この私はこの公生さんから願われておったんやっただ。お前も大変な人生を生きているのでしよう。老病死の身の事実、あるいは人間関係に悩んで苦しんでいるのだから。涙も流すのだから。人に言えんこともあるだろう。そうやな、わしもそうやっただ。私も健康で苦しんだ。涙を流したけどどうにもならなかつた。それでも幸いに南無阿弥陀仏の教えに出あうことができたのだ。そのことが何よりであつた。どうか令和を生きるお前も、そのことだけは忘れんと南無阿弥陀仏の教えを聞いて人生を全うしてほしい。そのことが唯一の願いである。別にお金持ちになれとか、達者なものになれとか、そんなことは一つも願っておらん。ただただ南無阿弥陀仏に出あつてほしい。そして一緒に聞いていってほしい。そういう励ましを私は身に受け取ったのです。

そのことを知らず今まで六十年間来た。しかしやつと気づき、出あえたわけです。去年たまたま日記が出てきて、逆に励ましを受け取ったわけです。これは大きい。私が人生これからどういう人生になるか色々なものに出あつていくでしょう。思い通りならんことの連続ですよ。死にたいなと思うことも出てきます、多分。自分の計らひだけあれば投げ出しますね。あるいは体の問題ね、健康の問題ですよ。老いの問題です。それも出てきます。間違いない。孤独の

寂しさもこれからますます味わうのです。でも年を取るっていうことは娑婆の物差しでいうとダメなこと。いつまでも若くど皆さん頑張っているのだけど。私は年を取ることは非常にありがたいこと。年を取って自分の思い通りにならないことにこれから多々出あつていくことが実は大事なことです。私が言ってもなんの説得力もないですけれど私はそう思っております。

それはなぜか。ますます南無阿弥陀仏のその深い教えに出あつていけるのです。今はまだ私は浅い南無阿弥陀仏の了解ですよ。それが年と共にどうにもならんことに苦悩に出あつて、しかし南無阿弥陀仏のより深い教えに出あわせていただけ。変だけどそういう楽しみがあります。だから八十、九十歳、それは楽しみでもあります。いよいよ南無阿弥陀仏の教えに出あつていける。そう思うと光です、希望です。喜びです。人として生まれた喜びがここにある。南無阿弥陀仏の教えに益々出あつていける。なんかそういうことを本日の追弔会という大切なご縁に出あわせていただいで思つたようなことでございます。どうもありがとうございます。

#### 《編集後記》

◇本文は令和六年八月十三日、浄光寺「追弔会」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

#### \*行事のご案内\*

「除夜の鐘」

大晦日・午後十一時半

「修正会」

元旦・午前零時

除夜の鐘に引き続き本堂で修正会のお勤めをします。

「きこまいけ」

毎月二十八日午後二時

※十二月～二月休講